

生産性向上による持続可能なきゅうり栽培を目指して

東北農林専門職大学附属農林大学校

野菜経営学科 菅井 真生

課題設定の理由

私は、農林大学校卒業後に即就農し、きゅうりのハウス早熟栽培に取り組む予定である。ただし、きゅうりの整枝作業の習得には、経験が必要である。将来、経営規模拡大を図るためには、雇用による労働力の確保も考慮し、経験の浅い従業員でも簡単に取り組める整枝方法が必要と考えた。そこで、本県で栽培事例の無い「つる下ろし栽培」に注目し、省力的で誰でも取り組める整枝方法を開発し、生産性の向上を目指した。

取組内容

- ・つる下ろし区：自作のフック(図1)によるつる下ろし栽培(図2、図3)、親づる摘心なし、県内での栽培事例なし
- ・慣行区：親づる30節で摘心 ※他の栽培管理は両区同じ

試験結果

- 1 商品化収量は、慣行区が多かった。(図4)
- 2 労働時間は、つる下ろし区が慣行区に比べ約40%少なくなった。(表1)
- 3 1日当たりの所得は、両区ともほぼ同程度であった。(表1)



図1 自作の誘引用フック

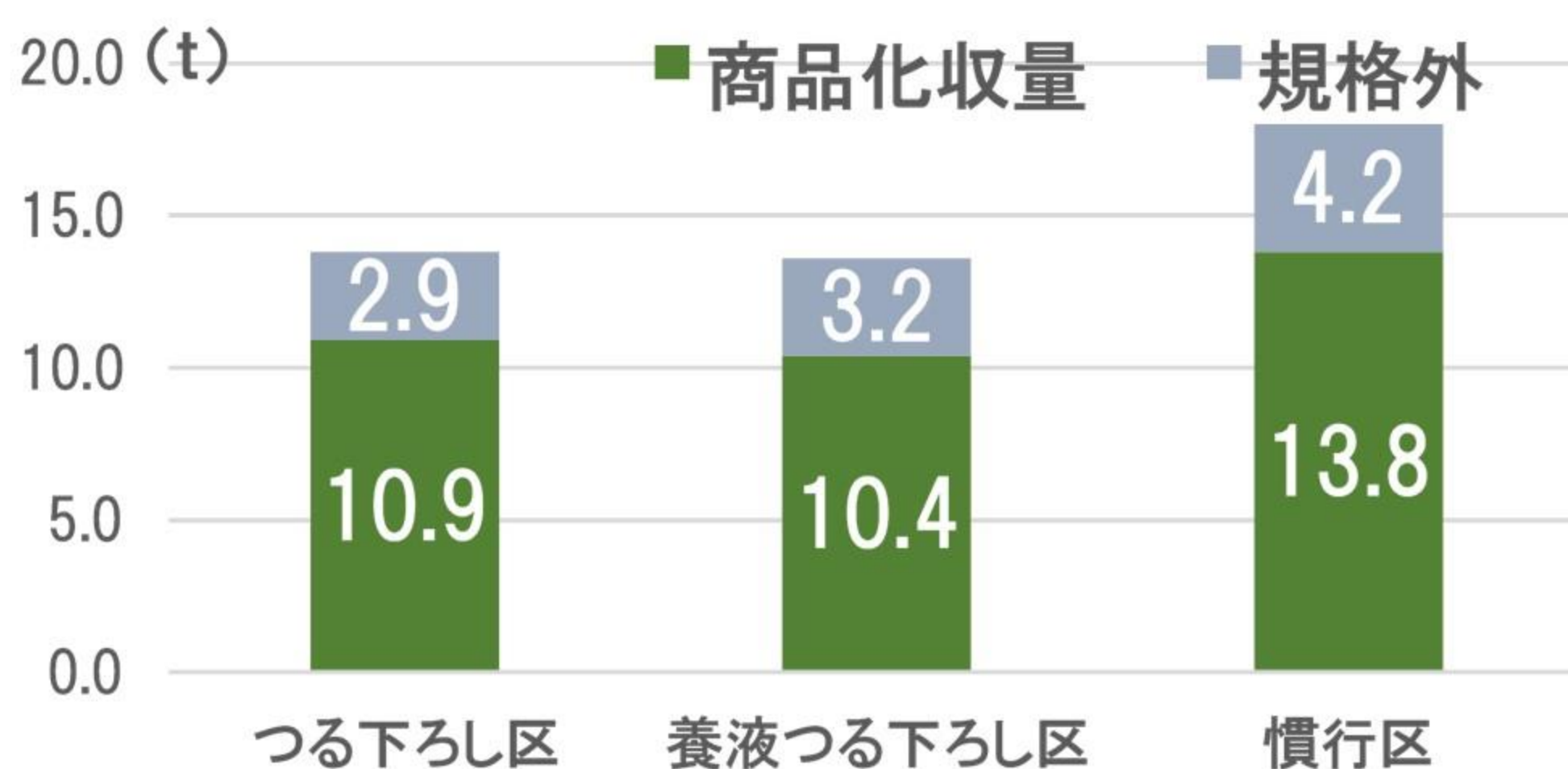


図4 収量(10aあたり10/21現在)



図2 つる下ろし区(10/4)

図3 つる下ろしの様子
10/21現在

表1 経営収支(10aあたり)

	つる下ろし区	養液つる下ろし区	慣行区
所得(千円)	1,311	1,125	2,121
所得率(%)	46	41	58
労働時間(時間)	628	727	998
1日当たりの所得(円)	16,713	12,385	17,009

考察および今後の展開

※つる下ろし区は、収穫継続中(10/31現在)、慣行区は7/31で収穫終了。つる下ろし区は、慣行区に比べ商品化収量が少なくなったが、1日当たりの所得は、両区で大きな差はみられなかった。慣行区では7/31で終了したが、つる下ろし区は11月上旬まで収穫が見込め、長期間の収穫が可能であった。つる下ろしと自作の誘引フックを利用することにより大幅に作業性が改善され経営の効率化を図ることが可能であり、労働時間を大幅に削減できた。このことから、少人数での作業が可能であり、経営規模の拡大が見込める有効な栽培方法であると考えられる。

※参考文献等：熊本県農業研究センター研究報告 第18号、4 果菜類振興指標(山形県農林水産部)

作型を生かすキュウリのつくり方(稲山光男/高橋英生 著)